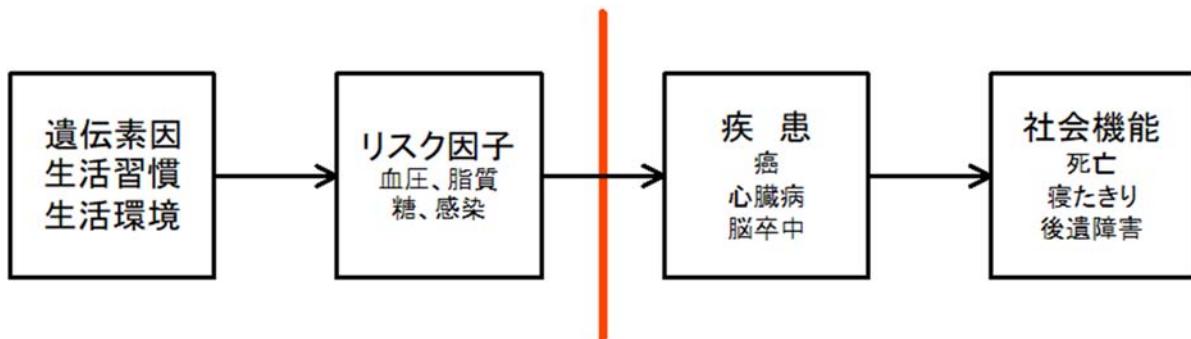


医療費は治療費と予防費に分けよう

2025年1月19日

『そもそも論』の第33回は、「医療費は治療費と予防費に分けよう」です。前報で述べたように、健康障害の予防は将来の病気の発生を未然に防ぐもの(一次予防)、あるいはそのような病気の顕在化を防ぐもの(二次予防)です。効果は確率的なもので、確実ではありません。だから「予防は楽しくやろう！」と声がけしました。

そうなると、下図の赤線の右側に行った場合の「治療」と赤線の左側で留め置く「予防」は人生における意義が異なるものであり、「治療費」と「予防費」は別のものとして考える必要があります。治療は起きてしまった健康障害に対する“事後措置的reactiveな”行為ですからその費用は少ない方がよいのですが、医療を不要にする予防は幸せを追求する“先行投資的proactiveな”行為ですから、ある程度お金をかけてもよいのです。予防が楽しいものであるなら、予防費はレジャー費とつながるものになるでしょう。



とは言いましたが、ここにパラドックスがあります。一般に多額の医療費(治療費)がかかるのは人生の最終段階(致死的な病気)の医療です。なので、寿命が長くても短くても人生の通算医療費はそれほど変わらず、長生きすれば医療費が減少するとは言えないのです(かつて「禁煙が進んで長生きすると生涯医療費が少し増える」という厚労省研究班の試算がありました)。したがって、生きる年数や人生の質(QOL)で補正するなど、医療費の評価も少し考え方を変える必要があります。しかし、もし予防医療の徹底で全員が天寿を全うするとろこまで行き、最期も老衰ということで積極的な医療を行わなくて済むのであれば、長寿になっても治療費が削減できる可能性はあります。